

「母なる」 Amherst

新井 明

わたしの世代はいわゆる少国民としての教育をともに受け、「八紘一宇」の精神を叩き込まれた。「今日よりは願みなくて大君の醜しづの御楯と出で立つわれは」（『萬葉集』卷二〇、四三七三）。天皇のいます御国のために命を捨てる、そして最後は靖国神社に葬られる、それが日本国民としての名誉ある生き方である、と。国民学校では校門脇に奉安殿が建ち、その中に祀られてある天皇・皇后両陛下の御真影にたいして、各人最敬礼をしてから校庭に、さらに校舎入り口へと進む。そうした忠君愛国主義の学校教育は当時は声高らかに進められたものだ。それはそれとして、日常生活で今でも忘れられないのは、食料事情の悪さであった。腹をすかせながら、東京の片隅の国民学校は卒業した。都立の中学校に入学したころ、駅前一帯の長屋は倒されることになる。強制疎開の指示を受けたのである。わが家もどこか田舎へ去らなくてはならなかった。ちよつとした縁を頼って山形県の鶴岡へ行ったのは、そういう事情からであった。移っていった翌年の中学校二年生の夏、八月一五日、校庭に集合させられて、不動の姿勢で天皇の放送を聞かされた。天皇のことばとなれば、ソ連に対する開戦の詔勅かもしれない、と思いつながら（いや、半ばそう期待しながら）、「玉音」なるものを聴かされた。満洲（現在の中国東北部）に攻め込んできたらしいソ連に対する開戦の詔

勅があつていい時期なのだ。じつは天皇がなにを言っているのか、分からなかった。ただ直後の和田信賢氏の再読で、戦争は止め、ということだと分かった。女性の事務職員の方がたは泣いていた。

かくして一五年戦争は終わった。完全な敗北であった。しかし「国側はこれは「戦いの矛は収める」のだということにしたかったのであろう。その後も、今にいたるも、公式には「終戦の日」と呼んでいる。その日の後は、混迷の日々がつづいた。われわれ若者たちも、どう生きてゆくべきか、路頭に迷う思いであった。しかも、敗戦の翌年の正月に天皇が出した「人間宣言」は打撃であった。われわれ若者たちは言いたかった、——天皇よ、あなたは神を捨て人間になることができた。しかし、あなたの名のために人間としての生命を捨てざるをえなかった日本人——軍人・一般人——三二〇万人、それ以上に日本人が海外で奪った他国の人びと二千万人の生命への責任は、どうなるのか、と。かくして、かつて少国民としての訓育を受けた世代の精神的混迷はふかかった。多くの若者たちが社会主義に傾いた。戦争は終わっても、期待した食料事情の好転などなかった。かえって悪さは深刻であった。

庄内の地にあるうちに、ウチムラ・カンゾウという名前が、学校の教師の口をとおしてわたしの頭に入った。『余は如何にして基督信徒となりし乎』には大きな影響を受けた。そのころ上野駅で父が「進駐軍の宣教師」から貰ったという「新約聖書」なるものを、捨てずに持って鶴岡の仮住まいにやって来た。それは今でもわたしの側にある。（その聖書は出版元としては「紐育・倫敦・東京 聖書協会聯盟」とあり、印刷に関しては“Printed in the United States of America”とある。）内村鑑三と聖書は、その後のわたしに決定的な影響を及ぼすことになる。

一九四八年の春にわが一家は湘南の一隅に移った。一九五〇年に東京教育大学に学ぶ身となるのだが、そのころには内村、塚本虎二、矢内原忠雄らの著作にわずかながらではあるが、触れていた。一九五三年に前田護郎が始めた世

田谷聖書会に加わる。その後、文学部の大学院生となったわたしに前田が突然「内村鑑三スカラシップ」の試験を受けよ、と強く勧めた。調べてみると、それは一九五六年四月二二日の聖日、聖書講義が終わった直後の時間。驚いたわたしは、ただただ言われるままに書類をととのえざるをえなかった。すると四月六日に矢内原先生から、電報が届いた。(わが家に電話などなかった。)「二八ヒ一〇ジ メンセツノタメ トウダイソウチヨウシツニ オイデアリ タシ ヤナイハラ」。その日、その時間に東大総長室に行ってみると、その部屋の前に学生風の若者が二人ほど、同じ目的で呼ばれた者たちらしく、神妙に待機していた。だいぶ待たされた後に、わたしは最後に部屋に呼び込まれた。「こちらはOtis Cary君、こちらは高木八尺君」と、総長は他の二人の尋問者を紹介した。半時間ほどの英語での面接であったが、すこし経つと、矢内原先生から日本語になった。するとOtisさんという人が、とつぜん京都弁で喋りだったので、わたしはびっくりした。この人、なんだろう?と。その京都人ケリーさんから「合格」の通知が届いたのは五月一日のことであった。前田の口からAmherstの名が出てから、一〇日も経っていなかった。

わたしにとって問題だったのは、戦勝国アメリカであった。一〇年ほど前までは、あれほど激しく戦い合った相手国だ。その国のカレッジに赴いて、頭を下げてモノを習う、ということが、ひとつ間尺に合わぬという気持ちで働いていた。どこかに軍国少年的な愛国心が残っていたのだろう。ケリーさんから聖路加国際病院で身体検査を受けるようにとの指示があり、東京・築地へ行って検診を受けた。その結果は、この体では、とても留学は無理だ、そんな体力はない、ということであった。その問診を受けた後、近くの、東京湾の岸辺に出た。食べるものも、ろくに食べずに二四年を過ごしてきたのだ。(今だって、腹がすいている!)体が弱いのは当たり前だ。そして思ったのは、これでこの海の彼方へ連れて行かれずにすむかも知れない、ということであった。聖路加の結果を知ったケリーさんは、奥様になにか一筆書かせたらしい。アリス夫人は医学博士——米国の!——であった。数日にして、新井の留学は

正式に決定されてしまった。

パン・アメリカン「ストラト・クリッバー」に乗せられて、初秋九月一〇日、羽田を飛び立った。九二日後、一二日午後に Bradley 空港に降りる。ケリーさんが自家用車で待っていてくれた。嬉しかった。Amherst に着くや、ケリーさんは学長や Dean に紹介してくださった。こちらは興奮していて、ろくに英語も喋れなかった。日本からの荷物はずでに届いていて、見知らぬ学生たちがわたしの顔を見るや、たちどころに North College の四階の部屋まで、嬉しそうにして運び上げてくれた。学生食堂は開いていた。食堂の豊かさは、まさに驚きであった。ヴァイキング風に並ぶ食材の質の良さ、多様さ！パン、牛乳、肉、魚、サラダ、バナナ、各種のスープなどなど。どれだけ食べても、飲んでもいいのだ。当時の日本では、とうてい口にできない質と量の食材が並んでいた。これは天国だ！と感じた。これが無かったならば、その後の半世紀はわたしには、まず無かつたらう。

Amherst の教育はチャペルでの「徳育」が基盤をなし、そして「知育」があった。その「知育」が大変であった。Barber 教授、Simpson 教授、その他の先生がたが、ほとんど週ごとに面接・指導してくださった。わたしは英語力・批評力が足りず、また哲学、歴史の知識を欠いていた。秋学期は悪戦苦闘。Barber 教授からは最初のうちは「英文学史」でごく低い評価が出た。一〇月の日記に「今に見ている！という敵愾心を起こす。そう、滅茶苦茶に闘ってみせる」などと書いている。戦争中に少国民として培ったヤマト魂が芽を吹き出している。楽であったのはギリシア語とドイツ語の演習くらいであった。（その基礎は、じつは東京でつけてあった。）

その秋の短歌が残っている。「アマストの庭に榎かしの葉散り敷きぬ思ほゆるかな故郷の秋」。

新年、一九五七年に入ると、授業もやや楽になってきた。成績も向上し、二年目の秋学期からは、Barber 教授が

卒業論文の指導を始めてくださった。(この方は *Shakespeare's Festive Comedy*, 1959. の著者となる学者であった。) 今でも忘れられないのは Baird 教授のシェイクスピア講義・演習、W. Gibson 教授の一九世紀英詩講義、DeMott 氏の「文学と社会」、Leo Marx 教授の「アメリカ文学史」など。

一九五八年の初冬、Cole 総長から呼び出しをうける。五月の卒業式に正式の卒業生に認定したい。それにしても「体育」の単位がない。きみは日本から来たのだから、泳げるであろう。プールで泳いでみせよ。それを正式単位として認め、B.A. を授けると。「徳育」、「知育」、「体育」が「自由高等教育」liberal arts の基本なのであるから、総長の「体育」の話は理にかなっている。真冬の室内プール——Pratt Pool? ——は暖かかった。貧に窮する日本の大学の施設しか知らないわたしには、プールの水が雪中のキャンパスで温かくなっているとは、まさに驚きであった。江戸川、最上川、相模湾などで、よく泳いだわたしは、手はヒラ、足はノシ。この自己流ならば、いくらでも泳げる。要求されていた距離はなんなくこなして、プールのへりに上がってくると、監視を託されていた水泳部の学生が、距離は十分だが、その泳ぎのスタイルはなんと言うのか、と質してきた。記録しなくてはならないらしい。わたしは答えた、——
“free style!”

それより、ちょうど一年前、わたしの Amherst の第一学期が終わったころ、こちらの血眼の悪戦苦闘の真つ最中、一九五七年の一月末かに、北垣宗治氏が Amherst に来られた。氏はスコットランドの St. Andrews 大学の学業を終えられていた。ちょうどケリー家が滞在された時期の Amherst に来られて、悠々と春学期を過ごされ、それから帰国なされた。ついでに Pelham の丘や、“Boys be ambitious!” の William S. Clark の墓を訪ねたことを思い出す。(Amherst でのこの時の)縁が後になってモノを言うようになるとは、思ってもいなかった。)

秋が深まりゆくニューイングランドで、こんなひとときを何回かつくってくれたフロストは、その数年後には大統領ケネディの依頼を容れて、ソ連へ行つた。それは親善のための文化使節としての旅であつた。が、アマーストの思い出につらなるものとしては、それはあの老詩人にはおおぎょうにすぎる、過酷な旅のように思われてならなかつた。

詩人は帰国後、その年のうちに病み伏し、翌一九六三年のごく初めに、逝いて、終つた。

留学生としてアマーストに住み、しかしこの町に深く馴染んだのは、カレッジの教職員諸氏の誠実なご指導とともに、町一般の方がたが、かつての敵国から来た青年にたいして個人的にも心からの親切を尽くしてくれたからである。詩人フロストの時間なども、その町の皆さんがたと共に過ごし、共に楽しむという雰囲気があつた。そこにはニューイングランドの文化の深さがあつた。

一九五八年六月は、いよいよ卒業であつた。記録を見ると、その月の六月九日に○○○総長に呼ばれている。わたしがもう少しどこかの大学で勉強を重ねたいと念じていることは、一、二、三の教授に漏らしていたことなので、総長の耳にも入つていたのであろう。コロンビア大学とミシガン大学の大学院から入学許可が下りていた。コーネル総長はどちらの大学がいい、などということは言わなかつた。(かれはたしかコロンビア大学の教授をつとめた人物である。)ただ、論じた。——自分も日本へ行つたので分かっているのだが、日本は戦中にあんなに酷く痛めつけられたのだから、君はなるべく早く帰国して、母国のために働いてくれ。アメリカでPh.D.まではやらないこと。Ph.D.には約三年はかかるから、その後での帰国となると、研究条件の悪いあの東洋の国では、英米文学の研究な

どは、かえって出来なくなるかもしれない。(英米文学はわれわれでやるから、と笑った。) 話は“fellowship”のことにまで及び、五〇〇ドルを出してあげる、と言われた。

このことを、当時は京都に帰っていたケリーさんに、すぐ相談した。ケリーさんもお喜びで、コロンビア大学の日本語講師として推薦するから、New Yorkへ行きなさい、というご返事をくださった。しかし、わたしは熟慮のすえに、ミシガン大学を選んだ。最大の理由はその大学には、かつて同志社大学を教えたF.L.Huntley教授がいるからであった。この一七世紀英文学の専門家の膝元でMiltonを学ぼうと思ったのである。

Ann Arborに着くと、あまり日が経たないうち、大学院 Rackham School から呼び出しがかかって、M.A.取得志望の留学生全員に試験が課せられた (Eng.Lang.Exam)。メモを見てみると、九月一六日のことであった。わたしの点数は九六点であり、一九五九年夏学期の講義を一、二科目とれば、丸一年でM.A.がとれる部類に入れられた。これでアマーストのコール総長のアドバイスを生かすことが出来ると思うと、嬉しかった。(その夏はChaucerの演習をとった。)

ミシガン大学での一年は、アマーストに比べて楽であり、帰国後の研究を考慮して、課業以外にも手を出すことができた。(たぶんば Cambridge Platonists 関係の資料収集。) それだけ、アメリカの大学の環境にも慣れたということであつたらう。(M.A.論文では一七世紀の英詩人 George Herbert の残した稿本に関する調査を行なった。) 一九五八年の八月末には、本来ならば往路同様に空路をとり、羽田に帰り着くべきのだが、Fulbright 委員会に申し出て、Los Angeles 港からの海路をとることの許可を得た。太平洋の広さを実感しておきたかった。

ロサンゼルスを出る八月二八日に、Amherst の Cole 総長と Dean Porter に報告と感謝のことはをしたため、コール総長あての封書に現金一〇ドルを同封した。それくらいしか残っていなかったのだ。太平洋は約二週間かかった。

貨客船が房総の影を遠望しながら、横浜埠頭に着いたのは、九月九日。両親、弟妹、友人数名の姿が棧橋にあった。出発時には、この体では、異国での勉強など、とても危険だ、とまで診断された者が、かえって元気で帰国できたことが、まことに感謝であった。(どう考えても、まずはアマーストの学生食堂があった。New Englandのこのカレッジに二〇歳台の二年を過ごさなかったとしたら、その後のわたしの体は無かったかも知れない。Amherstはまさに「母」なるアマーストだ、と思いつつ、三年ぶりのわが家に帰着した。鎌倉在の家に帰って、すぐに見つけたのは、驚いたことに、八月三十一日づけのコール総長とデイン・ポーターからの、別々の感謝の書簡であった。

帰国して一〇年ほど経ったころのこと、アマーストの同級生たちからの問い合わせがあった。「きみがAmherstで得た最大のものは何であったか?」と。固き師弟関係が与えられたこと、生涯にわたる友人たちが与えられたこと、異文化を学ぶことの重要さを知ったことか、いろいろ答え方はあつたらう。アマーストの友人たちも、なにかそのような格好のいい返事を期待したのではなかったか。わたしの答えは、しかし正直で簡単であった。「Amherstがくれた最大のもは、この健康であった。」「あ、母なるアマーストよ!」

帰国してから母校・東京教育大学の修士課程にもどり、論文を提出し、修士号を受けた。その後、名古屋大学(一九六一年〜)、東京教育大学(一九六八年〜)、大妻女子大学(一九七七年〜)、日本女子大学(一九八一〜二〇〇〇年)と歩いた。満六八歳が日本女子大学の定年であった。

この女子大学に着任したときのことか、忘れられない。成瀬記念講堂に案内された。そこに入って直感したことは、それがAmherstのジョンソン・チャペルと、ほぼ同じ構図、似た雰囲気の間であるということであった。じょじょに分かってきたことは、日本女子大学は開学当初、成瀬仁蔵を支えた人物たち——たとえば麻生正蔵、塘茂太郎、松

浦政泰、その他——は、ことごとく同志社で新島に育てられた人びとであるということであった。日本女子大学に勤めることは、それしたい同志社に通ずることではないのかと思いつつ、目白のキャンパスに通った。しかもアマーストのジョンソン・チャペルを思わせる講堂が中心に立つ空間へ。

この目白の学園に満一九年勤める間に、学生生活部長（他大学でいうところの学生部長）、文学部長、総合研究所（初代）所長、成瀬記念館担当理事、等々を勤めさせられた。そうしたこと無関係ではないのだが、Jinzo Naruse, *A Modern Paul in Japan: An Account of the Life and Works of the Rev. Paul Sauegyama* (Boston, 1893) の監訳者となった。訳書名は成瀬仁蔵著『澤山保羅——現代日本のポウロ』（日本女子大学発行、二〇〇一年）である。本書によれば、新島—澤山—成瀬がいかに深い関係を有するかが判る。そのひとつの表われは、この三者が教育の根底に「徳育・知育・体育」の連携を位置づける、いわゆる「自由高等教育」liberal arts の思想を共有することである。成瀬はこの教育思想を（澤山の姿を思い出しつつ）目白の丘で実験してみた。わたしはこの女子大学に赴任してみて、ここに自由高等教育を掲げる教育の場の存在すること（あるいは、存在していたこと）を、初めて具体的に知ることになった。

日本女子大学を定年退任した（二〇〇〇年三月）後に、アマースト・カレッジの同窓生・卒業生用のパンフレット Amherst の編集者から一文を求められた。それにたいしては真面目に書いた。その返事をもとにして、次のような記事が出された。

Akira Arai turned sixty-nine at the beginning of the year. He retired last year from Japan Women's University, where he was a prominent Milton scholar. In his retirement, Aki writes he is busily "making lectures and writing

books.” He kindly sent me the text of a thoughtful autobiographical talk given on Okinawa last summer to Japanese, Chinese, and Korean physicians and nurses. It recounts how his conversion from his family religion (“a rather active sect of Japanese Buddhism”) to Christianity enabled him eventually to come to terms with the “national crime of brutal atrocities” committed by Japan in the 1930s and 1940s. He came to believe that the “declaration of light out of darkness, *cosmos* out of *chaos*,” as proclaimed in Genesis 1.1-3, “was absolutely right in the sense that without this declaration no human sin or crime can be cleansed. Here I felt in my heart, Japan, and I, a Japanese, might be released from sin, if this declaration made in Genesis in some day accepted in this island country of Japan.” (Spring, 2001)

この告白にもあるとおり、創世記の冒頭にある「光よ、あれ！」なることばに依って人生のまとめをしなくてはならないと自覚し、その方向での仕事にかかっていたところ、日本海側のある大学——北垣宗治氏が学長を務められたカレッジ——から、とつじよ学長としての招聘の意向が伝えられた。選考委員会、教授会の強い意向であるのと、とで後宮俊夫理事長は老躯を引っさげて、東京・目黒の今井館にわたしを二度ほど訪ねてこられた。二〇〇二年の晩秋から初冬にかけてのことであった。北垣先生も電話や書簡で新井を攻め立てた。この学園は基本的には、いわゆるリベラル・アーツ教育を芯とする教育の場であることは、それまで北垣さんから年ごとに送られてくる大学案内、時報を通して知ってはいた。つまり北越における同志社の創成である。

結局、新井は陥落した。北垣先生のおことばに逆らえなかった。着任前に「北垣学長の跡を」という文章を書いている。この大学の

建学の精神の根底には「神を愛し、人を愛する」というイエス・キリストの教えがある。それは「神に仕え、人に仕える」ということに外ならない。これがじつはリベラル・アーツ教育の軸なる「徳育」の内実である。この精神が青年じしんを生かす、また他人を生かす。ニヒリズムに陥っている現代に、また日本に求められているのは、これである。

一二年間にわたる北垣学長のご努力は、新島襄の「自由高等教育」の精神に立ってのご努力であった、と思う。この学園に貴重な基盤を据えてくださった。これからも、この北垣路線を忠実に歩み、発展させてゆくことが、先生のご努力、ご苦勞に報いる道である。あえて言わせていただければ、新島先生が書きのこしたように、「良心の全身に充滿したる丈夫ますらゐの起おこり来らん事を」と、わたしも叫びたい。この北越の地から、この国の行く道を照らす「ともしび」をかかげてゆくことはないか。

（『ブニューマ』第三号、二〇〇三年三月）

七〇歳をこえた身で学長を引き受ける。ということは一四四年がせいぜいである。それがそうはいかなかった。丸六年の北越の生活となった。しかしその六年を *Amherst* 以来の教育理念に立ち、しかも健康で通すことができたのは、かつて半世紀いじょうも前に、半ば栄養失調の体軀が *New England* のカレッジで豊富なカロリーに恵まれ、最初の二年を過すすことのできたことの結実である、と思っている。あゝ、わが *alma mater* よ！